

創作酒嚙

糺谷の白馬

KOUJIMA NO SHIROUMA

作・原口幹朗



もあり、広く稲作が行われていたが、不可解な話や玉川支流から羽田村沿岸に漁場があることから農家をやめ漁師へ変わる者が増え、放棄された田んぼは荒れ果ててしまった。村人は、何度か羽田奉行所へ二帯の不可解な事件の取り調べをお願いしたのであるが信憑性がないと

は、増上寺付近で、立ち食いうどん屋をはじめ、昼は、参拝客、夜は、夜泣きうどんで人気を博し、神谷町に店を出すまでになったのである。店主の九平に店を構えたらどうかと指南した人物が、麻布狸穴で酒屋を営む膳場秀吉である。立ち食いうどん屋の頃に商売を通じて知り合い、また客でもあり、酒と酒に合う肴も出しているかどうかと勧めた人物である。九平は、秀吉を信頼し、言うことをよく聞いていた、店で出す各国の酒も秀吉が選び納めていたのである。酒は、下り酒と地回り酒を置いていたが、地回り酒は「地回り悪酒」と呼ばれ、大衆は高い金を出しても下り酒を好んだ。

武蔵乃国羽田村に村人から恐れられ誰一人近寄りぬ不可解な場所があった。羽田村は、玉川沿いで海水と淡水が入り混じる漁場から豊富な魚や貝類が獲れた。また大師へ渡る渡し船もあり、人々の往来が盛んな場所であった。そ

こに、村人が立ち入ることのない集落があり、噂では、そこに入った者は二度と戻れないとか、迷い込んだ犬猫ですら出て来ないという話が広まっていた。村は、湿地帯で新田開墾奨励もあり、耕作した田んぼは私有地となったこと

取り合ってもらえず、原因究明はされぬままであった。時を同じくして、神谷町に「きのや」といううどん屋があった。昼夜たいそう繁盛しうどんの他にも、酒も豊富で、それに合う料理も出していた。店主の九平

そのような折、きのやに安くて美味しい酒が入り、九平は、秀吉に出して良いのか相談した。秀吉が吟味するといった感心し、この美味しい酒はこの酒かと九平に聞くが、出所がまったくわからないと言っているのである。この美味さで安いため九平は、売りたいと言っているのであった。ついでに、秀吉にこの酒だけは、直接買入れることの許しを得たいという話をした。秀吉は、そのような事は、店主の九平

が決めることで、私が決めることではないと返事した。ただ、秀吉は、出所がわからないところが、気になるところで白馬かと申し添えた。

九平の話では、下肥買いが糞尿を集めに来た折、一緒にこの酒の話をして、その場で味見させたというのである。下肥買いは、出所を一切明かさず、内密にして欲しいとしか言わず、ただ気に入れば買ってもらいたいとしか言わないそうであった。きのやの他には、神田の料理茶屋にも買ってもらっていると話したというのであった。

秀吉は、酒を造る以上幕府発行の酒株が必要で、造った酒はまず酒屋を通すはず、それが直接うどん屋に内々に持ち込むということは、解せぬと思った。しかしあれだけの美味い酒を造れる技量を持つていることもまた興味深いところでもあると感じていた。

きのやは、江戸市中でも地酒を多数取り揃えている店として有名になり、酒と肴目当てに飲みに来る常連客で繁盛していた。下り酒では、剣菱、白雪、老松、男山、池田酒の緑一人人気で、地回り酒の倍の値段で売れたのである。一方、関東地回り酒はというと、金婚や蓬萊山、星の井などを飲ませていた。その中でも出所のわからぬ酒が白馬として評判となり、下り酒に引けを取らぬと人気を呼んだのである。品切れとなることも

多々あり、無いと余計欲しがる客も増え飲みたい客は、連日のようにきのやに足を運んだ。

秀吉は、白馬らしき出所不明の酒を詳しく知りたいという思いが日増しに強くなり調べることにしたのである。密かに、密造酒ではないかという憶測を持つていたが、密造酒は天下の御法度であり、見つければ重罪である。迂闊に、そのような事は言えぬと内密に動いた。江戸市中では、密造酒を公にできないため、白馬と呼び密かに売られていたのである。秀吉さえ白馬に触れるのは初めてであった。

まずは、きのやに来た下肥買いの後を追うことにしたのである。馬車に積まれた肥樽の中に酒も積まれていると考え、その後を追えば、出所が判明するのではと考えた。気づかれぬよう遠くから後をつけた。芝から三田へそして品川宿を抜け、武蔵乃国羽田村付近に入った。荒れ果てた田んぼに入ったところで見失い秀吉は、慌てて探したが完全に見失った。秀吉は、地元の人々に聞いて回ったが、下肥買いは多数いること、その先は農家の空き家があるくらいで、あとは何もないこと、ふだん誰も立ち入らないため詳しいことは分からないという事を聞いた。また次の機会にとこの日は戻ることにした。

秀吉は、日ごろから付き合ひのある湯

島の筆墨屋「鳩文堂」の主人に白馬を出している神田の料理茶屋を調べて欲しいと頼んだ。

しばらくして、鳩文堂の主人から、神田の茶屋が分かったとの知らせが入った。秀吉は、すぐに鳩文堂へ走った。神田で「おてだま」という料理茶屋が白馬を出しているという話であった。早速秀吉は、おてだまという店へ足を運んだ。おてだまは、女将のお冨と三佳の女二人で切り盛りしており、たいそう繁盛している店であった。

秀吉は、挨拶を済ませ、白馬のことについて尋ねた。おてだまの女主人も出所はまったくわからないが、おいしいので買っているとのことであった。

麻布狸穴で酒屋を営む膳場秀吉は、神奈川の出であるが、芝の乾物屋「湊屋」に丁稚奉公で入り、下積みが長かった。昆布など行商して回った先に、きのやがあり九平と親しくなったのである。うどんなそは屋からすし屋、茶屋、居酒屋、大名屋敷などで商いをするうちに、これからは、酒を売れば儲かると考えた秀吉は、自分の店を持ちたいと考えるようになり、近辺で商いの場所を探していたのである。ちょうど麻布狸穴に売り家が出たことで店を出すことを決めた。

秀吉も酒が好きで、造り酒屋まで赴き、取引交渉をするなどして、扱う種類を増やした。まだ江戸にない銘柄に着

目し、逸早く取り扱うことで、新川あたるの酒卸し店からも一目置かれる酒屋であった。また秀吉は、老舗「ぬ利彦」の中澤彦七と親交を深め中澤の商いに大きく影響を受けた。一人で売るには限りがあるが、仲間と売れば一回当たりの仕入れ量を増やせ状態のよい酒を客に届けられるとぬ利彦にも相談し、同じ酒を分かち合って商いすることもあった。下り酒は新川に着くと、地場酒問屋に入り、その後、秀吉たち酒屋に引き取られていたのである。

秀吉は、高い高も増えてきたこともあり、池田、伊丹、灘、伏見から奈良にいたるまで自ら赴き避けの買い付けまで行うようになった。奈良の南都諸白は、酒質もよく江戸でいち早く売り出した酒でもあった。灘では、買い付けた酒を樽廻船で運ぶ手筈まで済ませ、煮を受ける新川の酒問屋との間も取り持つくらいであった。

買い付けた新酒を積んだ樽廻船が新川へ向けて出港したとの知らせも秀吉のもとに届き、ぬ利彦の中澤と共に酒を待つていた。十三日間ほど酒が着き、酒問屋と約定の確認を済ませ、荷の受け渡しの手続きを行った。秀吉は、早速中味を確認すべく、一樽運び酒を吟味した。しかし、中味の酒に違和感を覚えた。まったく違う酒のようで灘の酒というには、余りにも違うように思えた。納

得いかな秀吉であるが、引き取り契約を済ませており、荷受け拒否というわけにはいかなかった。中澤にも謝罪し、酒の運搬について話し合った。

それからしばらくして、樽廻船や菱垣廻船の海難事故が相次ぎ、下り酒が入らない時期が続いた。新川の酒問屋の貯えもなくなり、江戸市中から下り酒が消えるという事態に至った。ところが、秀吉と中澤の倉には、灘の酒が大量に残っており、これが飛ぶように売れたのである。

秀吉は、高くても売れるが、酒質に納得いかなかったため売価を下げて提供した。これがまた、秀吉が納めている料理屋の信頼を得るところとなったのである。またぬ利彦の中澤も秀吉同様に、売価を下げて提供し買付分の酒全量を捌いたのである。

これを聞きつけた江戸南町奉行所から、秀吉にお呼び出しがかかった。

南町奉行所の呼び出しの用件は、江戸市中で下り酒が出回らない中、秀吉が納めている料理茶屋から藩邸まで下り酒を何故提供出来たのかということ、また、関東地回り酒にも力を入れて、売っているということなどの事情聴取であった。幕府としては、今後も樽廻船の海難事故が予想され、下り酒の安定した供給が不安であることから、今後は、関八州の地回り酒に重きを置き、普及

のための協力要請で、助言を求めるものであった。そのために、酒株改めを發行するということである。つまり、造り酒屋を増やし地回り酒の酒質向上を図り、下り酒以上の酒を江戸でも造れるよう首尾を整えたいという御免関東上酒の発布であった。秀吉は、幕府方の酒運上金を増やすという意味合いも含まれていると感じ取ってはいたが、御免関東上酒には賛同し、全面的にお力添えしたい旨の返事をして帰った。

出所不明の地回り酒を追っていた秀吉であるが、酒株をとるよい機会でもあり、何とかこの良い酒を、正真正銘の地回り酒として世に出したいと考ええるようになった。そのためにも、造り手本人に会い話をしたいと思うのであった。

神谷町のきのやに来た下肥買いに、直接話をし、造り手に会わせて欲しいと訴えるが、知らぬ存ぜぬの一点張り、明かさずとしない。ただ頼まれて運んでいくだけだとしか答えない。一緒について行きたいとお願いしたが、仕事がなくなると思われた。隠れて後を追うしかなく機を待った。きのやの九平から酒が入ると連絡を受け後を追うことにした。

分からぬよう後を追うと、芝から三田、品川宿を抜けて羽田村へ向かう。今度こそは見失うことのなきよう慎重に後をつけた。羽田村の荒れ果てた農地の細い道に入ってしまった。前回見失った場所

である。今度は、すぐ後について、荷車の車輪跡も追った。何本かの道を分かれ進んだ。ふと振り返ると帰り道が分からなくなっていた。不安になった秀吉であるが、こは後を追うしかなかった。何としても突き止めたいという思いも通じて、一軒の大きな屋敷に入った。茂みに覆われ外界との隔たりが大きく、人目につかない何とも不気味な場所であった。

先ほどの肥を積んだ荷車が出て来たが、そのままどこかに帰っていくようであった。秀吉は、緊張の面持ちで、高まる興奮を抑えながら思い切つてゆつくりと中に入った。門を入り。しばらく歩いた先に母屋らしき家を見つけ戸をたたいた。しかし誰も出て来ず、人が住んでいない気がないのである。やはり農家の空き家なのかと思つたが、ではあの下肥買いはなぜここに入つていったのが分からなかった。

秀吉は、暗くなると益々帰り道が不明になると思い明るうちに、先ほどの荷車の車輪跡を追って荒地を出た。途中の分かれ道で迷いそうになつたが、草や枝を折つて目印としておいたため事なきを得て、無事に出て来られたのである。出たところで村人に会い大きな屋敷のことを尋ねた。すると村人は驚いて、あの空き家は、化物屋敷だと言っているのである。過去に、入った者が言うには、それは恐ろしい目にあつたとのこと、誰も

近寄らないという事であった。ではあの下肥買いは、なぜ入つたのかと聞くときいた農地で作物を作っており、糞尿を撒いているとのことであった。

秀吉は、どうしてもあの大きな屋敷が気になった。人が近寄らぬという事は、密造酒造りには都合がよい。あの屋敷で、酒造りが行われていると考えあらためて調べてみることにした。数日後再び屋敷を訪れた。途中の道には、所々にひもを結び目印とした。母屋はひと気がないため母屋以外の屋敷を調べた。屋敷の裏は、広い田んぼで米も作つていた。ということ、必ず人がいると察し、念入りに調べて回つた。母屋とつながる裏の家を調べていると地下に通ずる階段を見つけた。とても深い地下で真つ暗なためこれ以上は入れなかつた。秀吉は、次には灯りを用意し調べることにした。

秀吉が準備万端で、母屋裏の家の地下に入ろうとしたところ、灯りがもつておりひと気がするのである。秀吉は、静かに気づかれぬよう地下に降りた。ゆつくり入ると地下はとても広く、長く続いているようであった。遠くで誰かが何かしている姿が見える。まだ気づかれないが、どうやら麴を造っていることはすぐに理解出来た。やはりここで、密造酒が造られていると察した。一度外に出てどうすべきか考えた。何とか話をしたいと考えた秀吉は、出てくるのを

待つて、後を追うことにした。地下から出てきた男が屋敷から出て行くこうとしたところで、気づかれてしまった。

少し驚いた様子で男がこちらを見ている。秀吉は、すぐに駆け寄り丁寧挨拶をした。男はここで何をしているのかと尋ねた。正直に、すべてのいきさつを話した秀吉に、男は身分を明かした。男は、近くに住む田中幸之丞といひ密造酒造りも認めた。秀吉は、密造は伏せるゆえ酒株をとり、正式に造り酒屋として起業するようすすめた。聞けば田中幸之丞は、灘で酒造りをしていたが、これからは江戸が繁栄すると考え、江戸で酒造りをしたいと樽廻船で下ってきたのだという。しばらく新川の酒問屋で働いていたが、中々酒株が取れず、酒造りが出来ない日々が続いた。密造はご法度と知りながら少量ならと白馬造りを始めたと話した。次第に、注文が増えてきて、一人では手に負えないということであった。たまたま下肥買いが屋敷を通るのを見て、荷車で出来た酒を売ってきてほしいと商いの手を結んだことなども話した。

秀吉は、すべての話を聞くと正式に酒株が取れるようにするため、公に酒造りを勧め出来た酒は、全量引き取ると約束した。

秀吉は、南町奉行所に酒株発行の申し出を済ませた。酒株は、すぐに発行された。これで晴れて、白馬と呼ばれる密



※写真はイメージです

造酒から正式に地回り酒として、売れることになったのである。

田中幸之丞は、秀吉に礼を言うと、これから新たな酒は膳場秀吉の酒屋から納めて欲しいと相談した。秀吉は快諾したが、幸之丞に江戸地回り酒の酒質向上に向け技の伝授をお願いしたいと懇願した。造り酒屋を回り酒造りの技術の伝承をして欲しいという旨である。

これには、幕府方の意向もあることや報酬も出すことなどを話した。田中幸之丞は、報酬よりも、秀吉の人柄と酒への思いに惹かれ、この方について行きたいと引き受けることにした。

これにより、江戸地回り酒の酒質は著しく向上し、下り酒は入荷の減少を辿り、伊丹酒などは消滅の危機を向かえることとなる。

これがきっかけで、酒だけでなく、醤油も消費が増え和歌山から江戸へ出る醤油蔵も出てきたのである。

田中幸之丞は、造り酒屋の当主となり、伊丹など廃業寸前の造り酒屋から蔵人を招聘するなど地回り酒の更なる酒質向上を図った。羽田村の不可解とされた集落は、稲作農家も増え幸之丞は、奉行所へ麹株の発行をお願いし麹を作れる集落として、奉行所からお墨付きをもらった。

この地は、のちに麹谷(糀谷)と呼ばれることになるのである。